

- 宇佐美まゆみ(2004a) "A Preliminary framework for a discourse politeness theory: Key concepts." The International Conference on the Role of Language in the Dialogue among Civilizations. Faculty of Foreign Languages. The University of Isfahan, Iran.
- 宇佐美まゆみ(2004b)「自然会話を生かした Web 教材作成の摸索—自然会話分析結果に基づいてー」、第17回日本語教育連絡会議参加、発表、アンカラ、トルコ。
- 宇佐美まゆみ、木山幸子、李恩美(2004c)「『基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)』の開発についてとその活用法—会話という相互作用の実証的研究を可能にする文字化システムとして— (デモンストレーション)」、日本語教育学会秋季大会、新潟大学。
- 宇佐美まゆみ(2004d)「外国语教育とディスコース・ポライトネス理論」、外国语教育学会第8回大会、東京外国语大学。
- Suzuki, Takashi and Mayumi Usami(2005a) "Co-constructions in English and Japanese revisited: A quantitative approach to cross-linguistic comparison." 9th International Pragmatics Conference. Riva del Garda, Italy.
- Eunmi Lee and Mayumi Usami(2005b) "The functions of "speech levels" and "utterances without politeness markers" in Japanese and Korean: from the perspective of discourse politeness", 9th International Pragmatics Conference, Riva del Garda, Italy.
- 宇佐美まゆみ(2005c)「談話研究におけるローカル分析とグローバル分析の意義」、言語情報学国内会議『言語情報学とは何か - 言語学・応用言語学・情報工学の言語情報学への寄与』、東京外国语大学。
- Usami, Mayumi, Rie Kibayashi, Sachiko Kiyama and Eunmi Kim. (2005d) "Development of "Basic Transcription System for Japanese (BTSJ)" and "Multilingual Corpus of Spoken Languages by Basic Transcription System for Japanese (BTSJ) -Japanese Conversation" -Theoretical background and the Research on human interaction." Workshop on Spoken Language Corpus C-CORAL-ROM and UBLI Spoken Language Corpus -Significance and its Application. Tokyo University of Foreign Studies. Tokyo, Japan.
- Usami, Mayumi (2006a) "Discourse Politeness Theory and Cross-cultural Pragmatics." Victoria University of Wellington. Wellington, New Zealand.
- Usami, Mayumi (2006b) "Discourse Politeness Theory and Cross-cultural Pragmatics." The University of Melbourne. Victoria, Australia.
- Usami, Mayumi (2006c) "Discourse Politeness Theory and Cross-cultural Pragmatics." Monash University. Melbourne, Australia.
- Usami, Mayumi (2006d) "Discourse Politeness Theory and Intercultural Communication" 16th World Congress of Sociology. International Convention Center Durban, South Africa.
- 宇佐美まゆみ(2006e) パネル、「自然会話を生かした会話教材開発の展開の可能性」(パネル分類: ペタコジー; 会話教育・まとめ役・司会、指定討論者、日本語教育国際研究大会、コロンビア大学、NY、アメリカ)
- 木山幸子、宇佐美まゆみ(2006f)「人間の相互作用研究の基盤となる文字化システム: 会話教材作成への示唆」日本語教育国際研究大会、コロンビア大学、NY、アメリカ
- 宇佐美まゆみ(2006g)「日本語教育の観点から見た日本語のジェンダーとポライトネス」、パネル: 「日本語教育とジェンダー教師の立場から」(パネル分類: 白鶴学、社会言語学)、日本語教育国際研究大会、コロンビア大学、NY、アメリカ

人間の相互作用研究の基盤となる文字化システム: 会話教材作成への示唆¹

宇佐美まゆみ・木山幸子

1. はじめに

本稿では、人間の相互作用研究からの基盤となる文字化システムについて検討し、そこから会話教材作成に対して示唆することを論じる。まず、なぜ「人間の相互作用」という観点からの自然会話分析を行うのか、それを会話教育にどのように生かし得るのかに触れた上で、その分析を合理的に行うことのできる文字化システムに必要な条件は何かを確認する。続いて、そのような「人間の相互作用」という観点から、既存の文字化システムについて簡単に概観する。それらを踏まえて、人間の相互作用を定量的にも定性的にも分析することを容易にする「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」(宇佐美 1997; 改訂版: 宇佐美 2003; 2006) の概要を述べる。最後に、自然会話における人間の相互作用の現象が会話教育においてなぜ重要であるかについて、BTSJ によって作成された文字化資料を用いた会話例を挙げながら論じることにより、会話教材開発への示唆を導きたい。

2. なぜ人間の相互作用を研究するのか

外国语教育の場において、学習者が、目標言語が用いられる社会の中で相手との対人関係を円滑に保ちながらコミュニケーションを行うために、自然会話における談話レベルのストラテジーを会話教育の場でもっと取り入れる必要があると考える。

実際の自然会話には、書き言葉には見られない、話し手自身も気づいていないような現象が多くある。例えば、あいづちを打つ、敬体/常体といったスピーチレベルの管理、中途終了型発話を適度にすることや、共同発話といった複雑な話者交替などの現象がしばしば見られる。これらは、会話の中で、話し手が意識的にも無意識的にも聞き手の様子や反応に応じて採るストラテジーであり、どちらか一方の話者の要因のみで成立するものではないという点で、「相互作用」であるといえる。

このような、会話参加者自身があまり気づいていないような1発話レベルを超えた談話レベルのストラテジーは、気づきにくく一見煩雑で不規則な現象に思えるものであるために、これまでの会話教育で体系的に扱われてこなかった。しかし、外国语学習者が目標言語を用いて実際に会話をするときには、母語話者のこれらのストラテジーにさらされる。彼らがこのようなストラテジーを上手に活用できれば、自然なコミュニケーションが可能となる。また、このような談話レベルのストラテジーは、往々にして相手との円滑な人間関係を調整する機能を果たしている。学習者の言語能力に問題はなくとも、談話レベルのストラテジーが活用できないために、不愉快だという印象を母語話者に与えてしまう可能性も考えられる。

本稿では、「人間同士の相互作用」を定性的にも定量的にも分析し、一見不規則に思える現象にもあるメカニズムが働いていることを解明しようという研究のプロセスを述べることから、これらの現象の会話教育での活用可能性についても検討したい。

¹ 本稿は、日本語教育国際研究大会(2006年8月5日-6日、ニューヨーク、コロンビア大学)にて発表されたパネル「自然会話を生かした会話教材開発の展開の可能性」(まとめ役・司会: 宇佐美まゆみ)における筆者らによる口頭発表「人間の相互作用研究の基盤となる文字化システム会話教材作成への示唆」と、そこで交わされた議論をもとにまとめたものである。

3. 人間の相互作用の定性的・定量的両面からの研究を可能にする文字化システムとはどのようなものか

話し言葉は、発せられた瞬間に消えていってしまうものであるため、それを分析するためには、録音し文字化資料に留める作業が必要である。話し言葉の文字化資料は、利用目的に応じた体系的な文字化システムに基づいて作成される必要がある。Edwards (1993: 3) は、どのような情報のタイプを残す（または無視する）か、どのようなカテゴリーを用いるかなど、書き起こされた空間的媒体において情報をどのように組織し提示するかに関する選択が、研究者がデータから受ける印象に影響を及ぼすと指摘する。

Edwards (1993) は、文字化システムを構築する際に考慮すべき原則を 3 つ挙げている。1 つ目は、カテゴリー・デザイン (*ibid.*: 5-6) と呼ぶもので、これは、表記法、韻律、話者交替、非言語行動などの会話における諸現象をどのように整理し提示するかということである。2 つ目は、読みやすさ (*ibid.*: 6-9) が挙げられている。研究者が必要とする情報を最も迅速に抽出するための考慮である。適切な表記法を選択し、文字化した情報の空間的配置の仕方を考慮しなければならない。3 つ目は、コンピュータ処理のしやすさ (*ibid.*: 9-10) である。

ここで、これらの原則に沿って、人間の相互作用を定性的にも定量的にも研究するのに適した文字化システムとはどのようなものか、要点を確認したい。

会話を紙という 2 次元の媒体に再現する際に、様々なレベルの会話に関する情報をどのように構成するかを選択しなければならない。話された言葉を永遠に 1 つのラインに書き続けることはできないため、どこかで区切る必要がある。つまり、文字化システムの構築にあたってまず検討しなければならないことは、研究目的に適した「分析の単位」の設定である。

どのレベルで単位を設けるかは、目的によって様々な方法が考えられる（次節で詳述）。本稿で焦点を当てている人間の相互作用の研究を容易にする単位とは、どのようなものか。それは、会話参加者が知覚した通りの文字化をするために、絶対的な基準ではなく相対的な基準を設けるということだといえる。それぞれの会話には、会話参加者たちが作り出すその会話特有の基本的なスタイルがある。ゆっくりしたペースで会話が進んでいく、冗談ばかり言っている、敬体で話すのが基本となっているなどといったことがある。人間の相互作用という観点から自然会話を分析しようとするには、会話における各情報について、それぞれの会話の基本状態を考えずに絶対的に判断することはできない。例えば、ゆっくりしたペースでの会話における 1 秒の間はさほど長く感じないだろうが、早口で交わされる会話における 1 秒の間は、長いと感じるだろう。会話参加者たちは、絶対値を測る計測器を持って会話をしているわけではない。会話の基本状態に照らし合わせることによって、与えられている情報がどのような価値を持つかを知覚する。したがって、文字化する際にも、実際の会話参加者たちの知覚を再現できるような相対的な単位を設ける必要があるのである。

次に、表記法の選択について考える。音声学の研究が目的であれば IPA で表記すればよい。また、日本語の方言研究では、その方言独特の珍しい調音を留めるために音声記号としてのカタカナ表記法が用いられた文字化資料もある（沢木 1984）。または、ローマ字表記という方法も考えられる。人間の相互作用の研究において、会話の中での話者同士のやりとりがどのように展開しているかを即座に把握し、分析・考察を進めるための直観を得るには、最も一般的に用いられている表記法を探すべきである。つまり、日本語においては、漢字仮名交じり表記が妥当だといえる。

最後に、定量的分析のしやすさについて、定性的分析に加え、定量的分析を合理的に行える形態で文字化資料を作成する必要がある。

4. 既存の文字化システムの概観

ここでは、既存の主要な文字化システムをいくつか取り上げ、人間の相互作用という観点と関連させながら概観する。

人間の相互作用の分析に適した文字化システムとして、英語のものでは、Gumperz and Berenz

(1993) の *Transcribing conversational exchange* がある。ここで強調されるのは、やりとりがどのように交わされどのような結末に至るかということについて、状況に応じた解釈ができるようになるとという点である。したがって、このシステムでは、やりとりにおいて参加者が認知した通りの文字化資料となるよう、相対的な基準が設けられている。分析の単位は、「インフォメーション・フレーズ (informational phrase)」である。これは、「リズムの面から見て区切られるものであり、また、韻律面から決定される発話の 1 部分でもあり、さらに、1 つのイントネーション曲線を持つもの (Gumperz and Berenz 1993: 95)」と定義される。談話の流れを見るためには、あまり細かく区切られていることは適切ではないため、十分な間があるところで改行されるようになっている。定性的分析を目的として発展したシステムであるため、定量的分析のための便宜はとくに図られていない。

次に、ロマンス諸語の比較分析を目的としたコーパス、C-CORAL-ROM において用いられている文字化システムを見る (Moneglia 2000; Cresti and Moneglia (eds) 2005 等)。多目的の活用を視野に入れながら、主に音韻論の研究に適するような設計がなされている。分析の単位の設定にあたっては、文法的な区切り方ではなく、語用論的観点から捉えようとする立場を探る。話し言葉において語用論的にひとまとまりの発話を認定するためには、イントネーションの観点から分析の単位を設ける必要があると主張し、*illocutionary criterion* という分析の単位が設けられている。「音韻論的な合図により、認知的レベルで発話行為が達成されたことを明示する。したがって、話し言葉の流れ (speech flow) は、音韻論的パターンから言語的行為が判断されるところで分割することができる。(Moneglia 2000: 8-9、日本語訳は第一筆者)² と定義される。

次に、CHILDES (Child Language Data Exchange System) における文字化システム (宮田 2004; MacWhinney 1995; 大島・MacWhinney 編 1995; 杉浦他 1997 等) を見てみる。CHILDES は、元来第一言語としての英語の習得の研究のために親子間の会話分析を想定して開発されたもので、現在 22 言語のデータが蓄積されている。CHAT (Codes for the Human Analysis of Transcripts) というデータ表記フォーマットに基づいて文字化資料が作成され、日本語版 (JCHAT) も開発されている。漢字仮名交じり入力もできるようになっているが、実際の分析のためにはローマ字表記に変換することになる。

このシステムでは、形態素、語、発話という 3 つの単位が設けられており、発話は、調子 (tone) によって認定される。文字化する際は、1 発話につき 1 行が設けられる。行の冒頭には、発話者名が記される。これは、このシステムが 1 人の話者による 1 発話の完結と話者交替が一致することを前提にしていることを意味する。親子間の会話では単純な発話や話者交替が行われるが、成人同士の会話では、より複雑な発話、また 1 人の話者による発話がなされている間にもう一方の話者の発話が挿入するなどといった複雑な話者交替も起きる。このシステムは、そのような複雑なやりとりの分析を第一に念頭においているわけではないといえる。

日本において開発された文字化システムでは、「日本語話し言葉コーパス (Corpus of Spontaneous Japanese: CSJ)³」という大規模なコーパスがあり、音声認識などの工学的研究の要請および言語学的研究の要請に同時に応えるという目的のもとに、文字化システム (前川他 2000; 小磯他 2001 等) が開発されている。表記法は、「発音形」(カタカナ) と「基本形」(漢字仮名交じり) の 2 種類である。分析の単位には、「転記基本単位」を設けている。これは、「原則として、200 ミリ秒以上のポーズ (言語音の途切れに相当。息・咳・笑い声などの非言語音もポーズに含む) に挟まれた範囲 (小磯他 2001: 45)」という絶対的な指標による単位である。また、発話以外の様々な現象を体系的に表現するため、タグを用いてフィラー、笑いなどを表す記号を付与している。

² 原文: "Prosodic cues specify at the perceptual level the accomplishment of a speech act. Therefore speech flow can be segmented into utterances every time a linguistic action is judged from prosodic patterning."

³ 国立国語研究所により公開されているコーパスである。

http://www2.kokken.go.jp/%E7%EC%97/public/index_j.html

CSJ の予備的分析対象⁴には、発話速度、言い淀みの分類、母音の無声化などが挙げられていることから考えると、この文字化システムは、形態素解析や音声の分析などの定量的処理に適するよう開発されたものであり、「談話の流れ」を捉えるといった語用論的分析とは異なる観点のものといえよう。

簡単に概観したとおり、英語等の文字化システムには語用論的な発話の機能という観点から分析の単位が設けられているものが見られるが、日本語の分析のためのものはない。そこで、自然会話における話者同士の相互作用を捉えるのに適し、さらにそれを定量的分析にも適用しやすいものとして開発したシステムが、次節で述べる「基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」である。

5. 「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」の概要: 人間の相互作用を定性的にも定量的にも分析可能とする文字化システム

宇佐美(1999)は、対人コミュニケーション研究の方法論として、「自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ」を提唱しているが、この目的は、言語使用という相互作用を通して、人間関係のあり方やコミュニケーション・ダイナミクスを探ることにあり、定量的・定性的両面の分析が必須のプロセスである。この「自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ」に適するようなものとして、「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)(宇佐美 1997; 改訂版: 宇佐美 2003; 2006)」は開発された。BTSJ は、その名の通り、「基本的な文字化の原則」であり、特定の研究目的に応じて、例えば、より詳細な音声情報を付加するなど、BTSJ を基本にしつつも、独自に活用することができる。

BTSJ における分析の単位は、「発話文」である。「発話文」とは、「会話という相互作用における「文」(宇佐美 2003:4)」と定義される。これは、基本的に、「文」を成していると捉えられるものを「1 発話文」としているが、自然会話では構造的に文が完結していない発話もあるため、話者交替や間なども考慮を入れる。例えば、C-ORAL-ROM では、分析の単位をイントネーションによって定義している。ところが、人間の相互作用に関心があるとき、自然会話特有の複雑な発話や、話者交替といった現象を扱える必要がある。それには、イントネーションや間などといった音声的情報だけではなく、意味内容でまとまりがあるかどうかを判断するという観点も必要である。そのため、BTSJ では、構造的な文、話者交替、間を考慮して「発話文」という分析の単位を設けているのである。

BTSJ に基づく文字化資料は、表1の通りである。

表1. BTSJ による文字化資料の例

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
51	46	*	YF01	なんかこの部屋すごい寒い、くないですか?。
52	47	*	JBM03	=あ、寒いですか、やっぱり<笑いながら>。
53	48	*	YF01	はい、なんか入ったとたんすごい寒いな(<笑い>)と思って。
54	49-1	/	JBM03	えー、さっきなんか冷房 22°Cに設定…。
55	50	*	YF01	はあ。
56	51	*	JBM03	ええ。
57	49-2	*	JBM03	されたんですよ。
58	52	*	YF01	されてたんですか、ひ。

⁴ 次の URL から得た情報である。 http://www2.kokken.go.jp/csj/public/index_j.html

59	53	*	JBM03	やっぱりあれですか?、あんまり冷房には強くないほう>。
60	54	*	YF01	<そう>ですね、はい。
61	55	*	YF01	よくないですよね、体にあまり。
62	56	*	JBM03	ええ、私は好きなんんですけどね<笑い>。
63	57	*	YF01	あ、私の上司も冷房大好きな人で、(えーーー)すーごい冷蔵庫みたいな中で、仕事しないと頭が冴えないっていう(えー)人なんですけども。

ライン番号に加えて、BTSJ で分析の単位とする「発話文」の番号を記す列を設けている。2種類の番号を記しているのは、「発話文」と「話者交替」の関係を示すためである。BTSJ では、ライン 51-53 のように、基本的には話者が交替するたびに改行する。ただし、1ラインで発話文が終了する場合としない場合がある。また、ライン 60-61 のように、話者が交替しなくとも、同一話者が複数の「発話文」を続けて発するときは、「発話文」ごとに改行する。また、ライン 63 にあるように、相手の発話に重なる短い小声のあいづちや笑いについては、()に入れ、相手の発話の中の最も近いと思われる場所に挿入する。

また、表2のように「発話内容セル」の右側に「コーディングセル」を設け、個々の分析対象について様々な観点に応じてコーディングができる。例えば、スピーチレベルの分析をするのであれば、ライン 51、52 は敬体、53 は常体、55-56 はそれを示すマーカーがない、などといったことを表す記号をコーディングセルに記入していく。このようにして、後ほど個々の現象の頻度をソートし、集計することができる。

表2. BTSJ による文字化資料に追加したコーディングセルの使用例:
スピーチレベルの分析

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	発話文全体	発話文末
51	46	*	YF01	なんかこの部屋すごい寒い、くないですか?。	P	P
52	47	*	JBM03	=あ、寒いですか、やっぱり<笑いながら>。	P	P
53	48	*	YF01	はい、なんか入ったとたんすごい寒いな(<笑い>)と思って。	N	N
54	49-1	/	JBM03	えー、さっきなんか冷房 22°Cに設定…。	/	/
55	50	*	YF01	はあ。	NM	NM
56	51	*	JBM03	ええ。	NM	NM
57	49-2	*	JBM03	されたんですよ。	P	P
58	52	*	YF01	されてたんですか、ひ。	P	P
59	53	*	JBM03	やっぱりあれですか?、あんまり冷房には強くないほう>。	P	P
60	54	*	YF01	<そう>ですね、はい。	P	P
61	55	*	YF01	よくないですよね、体にあまり。	P	P
62	56	*	JBM03	ええ、私は好きなんんですけどね<笑い>。	P	P
63	57	*	YF01	あ、私の上司も冷房大好きな人で、(えーーー)すーごい冷蔵庫みたいな中で、仕事しないと頭が冴えないっていう(えー)人なんんですけども。	P	P

*コーディングの記号の意味(簡略化)

スピーチレベル S: 尊敬語・謙譲語などを含む発話 N: 常体の発話
P: 敬体の発話 NM: 丁寧度を示すマーカーのない発話

6. 自然会話を用いた会話教材はなぜ有益であるか

自然会話における人間の相互作用の現象が会話教育にどのような点で有益であるかについて、BTSJによって作成された文字化資料を用いた会話例を挙げながら考える。とくに相手の反応を窺いながら質問の仕方を修正するやりとり、複雑な話者交替、あいづちといった現象に注目する。これらの自然会話特有の「人間の相互作用」の現象に焦点を当てる際、BTSJによる文字化資料を用いることの意義を示したい。

以下の会話（表3）は、ある研究会に参加した学生たちが、研究会終了後に雑談をするという場面である。話者は、両者とも20代前半の日本人女性大学院生である。

表3. 自然会話を用いた会話教材化への示唆：初対面二者間会話の例から

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
51	46	*	小野田	じゃあ研修みたいなこともするんですか？
52	47-1	/	小野田	あの、日本語学校に行ってー、
53	48	*	宮武	あつ。
54	47-2	*	小野田	実際<教えるって>くれう…。
55	49	*	宮武	<日本語…>。
56	50-1	/	宮武	あ、えーと、今度実習があるんですけど、(うーん)あのー、どつかないで、ここで、
57	51	*	小野田	はい。
58	50-2	/	宮武	あの、募集をして、
59	52	*	小野田	あ、なんだ。
60	53	*	宮武	はい。
61	54	*	小野田	へー。
62	50-3	/	宮武	生徒さんを、あんまり日本語ができない人を、(うーん)募集して、
63	55	*	小野田	くはい>、はい。
64	50-4	*	宮武	生徒役になつてもらって(うーん)、実習をするんですけど。
65	56	*	小野田	=あ、なんですね。

このやりとりでは、宮武が日本語教育専攻だと聞いた小野田が、日本語学校で研修をするかどうかを聞いている。宮武は、日本語学校へは行かずに、学内で学习者を募集して実習をすると答えていている。

ここで、小野田は、ライン51、52、54で、2発話文にわたって質問をしている。2度目の質問では、1度目にした質問の補足をしているが、その2度目の質問は中途終了型発話という形でなされている。水谷（1993）で指摘されているとおり、日本語の話し言葉には、あまり断定的な言い方をせず自分の発話を最後まで完結させないといった特徴が見られるが、質問をするにも、何度も疑問文をたたみかけると、場合によっては相手におしつけがましい印象を与える恐れがある。それを避

けるために、2回目は中途終了型発話を用いているのだろうと解釈できる。中途終了型発話などの文末に丁寧度を示すマーカーのない発話は、25%から30%程度現れるという宇佐美（2001）の報告もあるとおり、中途終了型発話は、日本語の話し言葉における特徴的な現象の1つといえる。

次に、やりとりの後半、ライン56から65を見る。ここは、宮武が実習の説明をするところで、やや長い発話である。宮武の説明を聞き終わる前に、小野田は、宮武が言おうとしている大体の内容を理解し、「あ、なんだ」「へー」「はい、はい」とあいづちを挿入している。これは、相手の発話を遮るためにしているのではなく、相手の意図ができるだけ早くつかみ取り理解を示すことによって、会話を協調的に参加しているものと解釈できる。また、説明をしている宮武のほうも、小野田の「あ、なんだ」というあいづちに対して、自分の説明を中断して「はい」と答えてから続きを説明をしている。話し手のほうも、一方的に説明を続けるのではなく、相手がこの話題に興味を持って聞いているかどうか様子を窺いながら自分の発話をしているようである。このように、一方の話者の発話の終了まで、もう一方の話者はただ黙って待っているわけではなく、聞き手としての役割を示す言語行動をとっている。

これらのような1発話レベルを超えた談話レベルの現象について、作例で示すというのは非常に難しい。自然会話を用いた会話教材の有益な点は、中途終了型発話のような文法的には不完全な構造を持つ発話の機能、また、自然なあいづちの打ち方などについて、学習者に気づいてもらうことができるにある。

7. おわりに

ここまで、簡単に、人間の相互作用の研究とはどのようなものか、人間の相互作用を捉えるための文字化システムの開発には何を考慮する必要があるか、また、その文字化システムによって作成された文字化資料を見ながら、自然会話の特徴を会話教育に生かせる点について述べた。BTSJの改行の原則の通りに文字化すると、実際に研究に用いるのではなくとも、日本語の実際の話者交替はどのように行われているのか、分析的に把握しやすくなるだろう。学習者が、自然会話のやりとりについて自ら分析的に捉えることは重要である。そのような現象に気づくことによって、すぐ産出に結びつくわけではなくとも、意識し続けることが習得につながるのではないか。それに、BTSJによる文字化資料を中心に据えた教材を作成し、1発話・複数発話の連鎖といった会話を区切った提示の仕方ではなく、より長い流れで談話を提示することが有益だろうと考える。表計算ソフトを用いている BTSJ は、発話内容の右側の列を自由に活用することができる。教材化の際に、右側の列に自然会話の特徴をマークし、そこからさらに詳細な説明の画面へリンクさせるなどすることができるだろう。

本稿で提示した話し言葉における人間の相互作用を素材とし、実際の自然会話教材の構築を進めることがこれからの課題である。

引用文献

- Cresty E. and M. Monoglia (eds) 2005. *C-CORAL-ROM: Integrated reference corpora for spoken Romance languages*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Co.
- Edwards, J. A. 1993. Principles and contrasting systems of discourse transcription. In Edwards and Lampert (eds.) *Talking Data*. Hillsdale, New Jersey, USA: Lawrence Erlbaum Associates, Inc. 3-31.
- Gumperz, J. J. and Berenz, N. 1993. Transcribing conversational exchanges. In Edwards and Lampert (eds.) *Talking Data*. Hillsdale, New Jersey, USA: Lawrence Erlbaum Associates, Inc., 91-121.
- 小磯花絵他 (2001)『日本語話し言葉コーパス』における書き起こしの方法とその基準について』『日本語科学』9、43-58。
- MacWhinney, B. 1995. *The CHILDES project: Tools for analyzing talk (2nd edition)*. Hillsdale, New Jersey,

- USA: Lawrence Erlbaum Associates, Inc.
 MacWhinney, B.監修・宮田 Susanne 編 (2004) 『今日から使える発話データベース CHILDES 入門』、
 ひつじ書房。
- 前川喜久雄他 (2001) 「日本語話し言葉コーパスの設計」『音声研究』4(2), 51-61.
- Massimo Moneglia 2000. A note on spoken language corpora: Units of analysis and language sampling strategies. European Science Foundation Scientific Network "Intersign: sign Linguistics and data Exchange" (workshop: "Morphosyntax: text corpora and tagging"), Certosa di Pontignano, 12-15 Marzo 1999
- 次の URL でも参照できる:
<http://www.sign-lang.uni-hamburg.de/intersign/internal/>
- 水谷信子 (1993) 「「共話」から「対話」へ」『日本語学』12(4), 28-36.
- 大嶋百合子・B. MacWhinney 編 (2005) 『日本語のための CHILDES マニュアル』、マックギル大学。
 次の URL でも参照できる:
<http://www.cyber.sccs.chukyo-u.ac.jp/JCHAT/jchatman.pdf>
- 沢木幹栄 (1984) 「方言録音資料の作成法」、飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 2: 方言研究法』、国書刊行会、325-347.
- 杉浦正利・中則夫・宮田 Susanne・大嶋百合子 (1997) 「言語習得研究のための情報処理システム「CHILDES」の日本語化」『言語』26(3), 80-87.
- 宇佐美まゆみ (1997) 「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) の開発について」『日本人の談話行動のスクリプト・ストラテジーの研究とマルチメディア教材の試作』、文部省科学研究費一般研究 (C) (課題番号 07680312) (研究代表者: 西郡仁朗) 研究成果報告書、12-26.
- (1999) 「談話の定量的分析: 言語社会心理学的アプローチ」『日本語学』18(11), 40-56.
- (2001) 「ディスコース・ポライトネス」という観点から見た敬語使用の機能: 敬語使用の新しい捉え方がポライトネスの談話理論に示唆すること』『語学研究所論集』6、東京外国語大学語学研究所、1-29.
- (2003) 「改訂版: 基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』、平成 13-14 年度科学研究費補助金 基盤研究 C(2) (課題番号: 13680351) (研究代表者: 宇佐美まゆみ)、研究成果報告書、4-21.
- 2005 年 2 月 25 日に改定の最新版は、次の URL でダウンロードできる:
<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsj.htm>
- (2006) 「話し手と聞き手の相互作用としての「共同発話文」の日英比較—「共話」、「Co-construction」現象の再検討—」『高見澤孟先生古希記念論文集』、高見澤孟先生古希記念論文集編集委員会、103-130.
- (2006) 「改訂版: 基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2005 年 2 月 25 日改定版」宇佐美まゆみ編『言語情報学研究報告 13 自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ』、東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」、21-46.

付録

文字化資料で用いられている記号凡例

- 。 [全角] 1 発話文の終わりにつける。
 発話文の途中に相手の発話が入った場合、前の発話文が終わっていないことをマークするためにつけ、改行して相手の発話を入力する。
- 。 „ ① [全角] 1 発話文および 1 ライン中で、日本語表記の慣例の通りに読点をつける。
- 。 „ ② 発話と発話のあいだに短い間がある場合につける。
- 。 „ ① 模数読み方があるものを漢字で表す場合、最も一般的な読み方ではなく、特別な読み方で発せられたことを示すために、その読み方を平仮名で ‘ ’ に入れて示す。
- 。 „ ② 通常とは異なる発音がなされた場合など、音の表記だけでは意味が分かりにくい発話は、‘ ’ の中に正式な表記をする。
- 。 „ 視覚上、区別した方が分かりやすいと思われるもの、例えば、本や映画の題名のような固有名詞や、発話者がその発話の中で漢字の読み方を説明したような部分等は、‘ ’ でくくる。
- 。 „ 発話中に、話者及び話者以外の者の発話・思考・判断・知覚などの内容が引用された場合、その部分を“ ” でくくる。
- 。 „ 疑問文につける。疑問の終助詞がついた質問形式になっていても、語尾を上げるなどして、疑問の機能を持つ発話には、その部分が文末(発話文末)なら「?」をつける。倒置疑問の機能を持つものには、発話中に「?」をつける。
- 。 „ 確認などのために語尾を上げる、いわゆる「半疑問文」につける。
- 。 „ イントネーションは、特記する必要のあるものを、上昇、平板、下降の略号として、[↑] [→] [↓] を用いる。
- 。 „ /少し間/ 話のテンポの流れの中で、少し「間」を感じられた際ににつける。
- 。 „ /沈黙 秒数/ 1 秒以上の「間」は、沈黙として、その秒数を左記のように記す。沈黙自体が何かの返答になっているような場合は 1 発話文として扱い 1 ライン取るが、基本的に、沈黙後に誰が発話したのかを同定できるように、沈黙を破る発話のラインの冒頭に記す。
- 。 „ = 改行される発話と発話の間(ま)が、当該の会話の平均的な間(ま)の長さより相対的に短いか、まったくないことを示すためにつける。これは、2 つの発話(文)について、改行していても音声的につながっていることを示すためである。その場合、最初のラインの発話の終わりに「=」をつけてから、句点「。」または英語式コンマ 2 つ「,,」をつける。そして、続くラインの冒頭に「=」をつける。
- 。 „ … 文中、文末に関係なく、音声的に言いよどんだように聞こえるものにつける。
- 。 „ < >{} 同時発話されたものは、重なった部分双方を< >でくくり、重ねられた発話には、< >の後に、{ }をつけ、そのラインの最後に句点「。」または英語式コンマ 2 つ「,,」をつける。また重ねた方の発話には、< >の後に、{ }をつけ。
- 。 „ [[]] [全角] 第 1 話者の発話文が完結する前に、途中に挿入される形で、第 2 話者の発話が始まり、結果的に第 1 話者の発話が終了した場合は、「[[]]」をつける。結果的に終了した第 1 話者の発話文の終わりには、句点「。」の前に [[を

- つけ、第2話者の発話文の冒頭には「」をつける。
- 〔〕 文脈的情報。その発話がなされた状況ができるだけわかりやすくなるように、音声上の特徴(アクセント、声の高さ、大小、速さ等)のうち、特記の必要があるものなどをそのラインの一番最後に記しておく。
- () 短く、特別な意味を持たない「あいづち」は、相手の発話中の最も近い部分に、()にくくって入れる。
- < > 笑いながら発話したものや笑い等は、< >の中に、<笑いながら>、<2人で笑い>などのように説明を記す。笑い自体が何かの返答になっているような場合は1発話文となるが、基本的には、笑いを含む発話中か、その発話文の最後に記し、その後に句点「。」または英語式コシマ2つ「,,」をつける。
- (< >) 相手の発話の途中に、相手の発話と重なって笑いが入っている場合は、短いあいづちと同様に扱って、(<笑い>)とする。
- # 聞き取り不能であった部分につける。その部分の推測される拍数に応じて、#マークをつける。
- 「 」 トランスクriptを公開する際、固有名詞等、被験者のプライバシーの保護ために明記できない単語を表すときに用いる。

(宇佐美、2006:36-37より)

改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2007年3月31日改訂版

宇佐美 まゆみ

1. はじめに

本稿で提示する「基本的な文字化の原則(BTSJ)」は、「読みやすさ」を重視し、日本語表記の慣習にしたがって「漢字仮名まじり」で表記する。句読点も、基本的に、慣例にしたがって適当と思われる位置に打つ(詳細は「6.1 表記の原則について」参照)。

自然会話の定量的分析に適するように考案された BTSJ では、「発話文」を基本的な分析の単位とする。以下、発話文の認定の仕方、改行の原則、発話文終了に関する記号、「発話文番号」と「ライン番号」、表記方法と記号について順に述べる。さらに、BTSJによって文字化した資料を用いて行う分析例をも紹介する。

2. 発話文の認定の仕方

BTSJでは、「実際の会話の中で発話された文」という意味で「発話文」という用語を用い、基本的な分析の単位とする。これは、日本語では、スピーチレベルの分析など、「文」単位でコーディングをする必要があるものがあるためである。

「発話文」の定義は、会話という相互作用の中における「文」とする。そして、以下のように認定する。基本的に、ひとりの話者による「文」を成していると捉えられるものを「1発話文」とする。しかし、自然会話では、いわゆる「1語文」や、述部が省略されているもの、あるいは、最後まで言い切られない「中途終了型発話」など、構造的に「文」が完結していない発話もある。そのような場合は、話者交替や間などを考慮した上で「1発話文」であるか否かを判断する。つまり、「発話文」の認定には、「話者交替」、「間」という2つの要素が重要になる。

たとえば、1語の発話(例 1)、文末が省略された形で言い切られた発話(例 2)、話者が自分で発話の最後まで言い切らず言いよどんだ発話(例 3)や、第1話者の発話文が完結する前に、途中に挿入される形で、第2話者の発話が始まり、結果的に第1話者の発話が終了した発話(例 4)などは、話者交替や間があつた場合は、「1発話文」として扱う。いわゆるあいづちや笑いも、話者交替や間などを考慮して「1発話文」であるか否か判断する(例 5)。

また、構造的には「文」となっているが、独立した1発話文とはみなさない発話もある。例えば、何かを思い出そうとするときなどに用いられる「そうですねえ、歩くとですねー、12、3分かかります。」などのフィラーは、先行部・後続部とまとめて「1発話文」とする(例 6)。直接引用を含む発話文も同様である(例 7)。さらに、同一話者による「そうです、そうです、そうです」などの繰り返しも、「そうです」のみで「文」になってしまい、それらのあいだに間がなく、繰り返されたものがまとまつたものとして捉えられる場合は、それらをまとめて1発話文とする(例 8)。また、「行きますよ、学校に」のような発話は、「行きますよ」と「学校に」のあいだに間がない場合は、まとめて1発話文とみなす。この発話は、結果的に倒置の形となっている(例 9)。「行きますよ」だけでも「文」とみなしうるが、途中で相手の発話が入って話者が一旦交替したため改行され、複数のラインに渡っている発話も、同一話者によって発せられた「文」を成していると捉えられるものは、複数のラインにまたがる発話をまとめて「1発話文」とする(例 10、「3. 改行の原則」を参照のこと)。

以下の各例において、見出しの説明が指す発話文を「→」で示す。説明が、「→」で指した発話文の一部を指す場合には、さらに該当する部分に波線を引いて示す(例 6, 7, 9, 12 など)。また、以下の会話例では、話者はアルファベットの「A」「B」で示す(話者を表す記号に関しては、「6.3 プライバシー保護」を参照のこと)。各例文には、BTSJ 独自の記号がついているところがあるが、その説明は「7. 記号凡例」を参照されたい。

<付録> 数字の含まれる言葉の表記

(1) 算用数字で表記するもの

① 横書き表記の場合、算用数字(アラビア数字)は漢数字(一、二、三)より理解しやすいため、基本的には算用数字を用いる。

例1 助数詞を伴う数字

1年、1回、1台、1家族、1種類、1周年、1区間、1品目、1段階、1機種、1系統、1工程

② 大きな数を書き表す場合について、算用数字で記すことのできるものは算用数字で記す。

例2 「万、億、兆」などの大きな単位

5万、31万7,000、1,500万、1兆5,000億

例3 「十、百、千」の単位

50、300、4,000

(2) 漢数字で表記するもの

① 漢数字その者が漢字熟語の構成要素として用いられている場合(数字の意味が、数量、順序を示す用い方から離れて、特定の意味を持っているとき)は、漢数字を用いる。

例4 漢字熟語

「一般、一定、一端」、「万一、均一、唯一」、「一面識、一喜一憂、一拳手一投足」

例5 数字の意味合いの強い漢字熟語も、基本的には漢数字で書く

一周忌、一戸建て、一番乗り、一日署長、一家心中、第一線、世界一周、一万円札

② 概数を示す場合は漢数字で書く。

例6 「数十日」、「四、五人」、「五、六十万」

* (1)(2)については文化庁(1995)を、その他の部分については文化庁(1991)を参照した。

参考文献

文化庁編(1995)『言葉に関する問答集 総集編』、大蔵省印刷局

文化庁編(1991)『公用文の書き表し方の基準(資料集)増補版』、第一法規出版

日本語教育学会編(1982)『日本語教育事典』大修館書店、(「引用」の項、小谷野哲夫執筆、p. 187)

鎌田修(2000)『日本語の引用』、ひつじ書房

「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2007年3月31日版」について

宇佐美まゆみ・木林理恵

0. はじめに

本稿では、まず、宇佐美(2006)「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」2007年3月31日版(以下、BTSJ)について、2005年2月25日版よりさらに改訂された部分について述べる。それから、今回は改訂に至らず検討事項としている項目について述べ、最後に、最新の「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」の公開方法について紹介する。

1. 2007年3月31日版における改訂部分について

2005年2月25日版よりさらに改訂された部分は、以下の通りである。

1-1. 「4. 発話文終了に関する記号」について

例1のように、第1話者の発話文が完結する前に、途中に挿入される形で、第2話者の発話が始まり、結果的に第1話者の発話が終了した場合は、「【】」をつける。結果的に終了した第1話者の発話文の終わりには、句点「。」の前に【】をつけ、第2話者の発話文の冒頭には】】をつける。

例1 →1 A それは、高校、でもくあの…>{<}【】。
→2-1 B]】<現代国語っていうと、>{>}あの、国語の…,,
3 A はい。
2-2 B その、あっち、くだけですか?>{<}。

この記号に関する説明は、2005年2月25日版までは、「6.2.2 音声的情報」における「発話の重複」の項にあった。しかしこれは、発話文の終わりを示す記号であるため、「4.1 発話文終了の記号」の項で説明するよう移動した。

1-2. 「6.2.3 周辺言語情報」について

ここでは、以下の2つについて、改訂をした。

① 「笑い」の例文の追加

BTSJでは、聞こえたものとなるべくそのまま表記している。ゆえに、笑いも、笑いが起った場所に表記する。特に、笑いながら発話をしている場合は、発話の終わりではなく、笑い始めた箇所に<笑いながら>を書くことが望ましい。そこで、以下のようない例を追加した。

例2 A 資源効率的に使おうと思えば、<笑いながら>それしかないのであります。

② 文脈情報の説明と例の追加

文脈情報の説明は、「その発話がなされた状況ができるだけ分かりやすくなるように、音声上の特徴(アクセント、声の高さ、大小、速さ等)のうち、特記の必要があるものなどを、研究者が分析の際のメモとして活用できるよう記しておく。」と書かれている。音声的な特徴としては、以下の例3のように、会話の雰囲気を表すものも入る。そこで、例を追加した。

例3 A こたつから根生やしてんじやないか<笑いながら>って父親と弟は